

# 文藝春秋 SPECIAL

アドラーの教え  
サラリーマンよ  
「嫌われる勇気」を持て



岩井克人  
日本型  
経営2.0  
とは何か

# ニッポン 逆襲の組織論

ソフトバンク、東芝、セブンイレブン、三菱自動車

流出! 衝撃の機密ファイル

## 北朝鮮雷内部文書1万2千ページ

# 大日本史

## 第三回

### アジアを変えた日清、世界史を変えた日露

世紀の変わり目に台頭した新興国、日本。それは世界史のゲームを大きく変えた。架空戦記科学技術・インテリジェンス——新たな視点から明治の二大戦争を論じ尽くす



山内昌之

明治大学特任教授・東京大学名誉教授



佐藤 優

作家

佐藤 今回の日清・日露戦争を論じたいのですが、そのとき頭に置いておきたいのは、現在との対比です。たとえば一八九四年に起きた日清戦争と現在とでは大きく隔たっているように思えるけれど、構造として捉えると、実は、現在の世界は日清戦争前夜と類似する点が少なくない。

まず当時の中国、すなわち清朝は、アヘン戦争やアロ一号事件などで大きな打撃を被っていました。アジアの強大な帝国でした。その清朝を相手に、琉球、台湾、そして朝鮮半島との関係をめぐって、日本は緊張状態にあったわけです。つまり、強い中国、周辺地域への影響

力をめぐる対立、そこで生じる軍事的・外交的緊張という構図は、まさに現在に通じるものがある。その類似を見抜く目が、日清・日露の時代を読み直す上で重要だと思ふのです。

山内 そう、当時の国際社会、ひいては日本人も、清朝は弱つてはいるけれど、まさしく「眠れる獅子」であつて、潜在的には日本より国力が高い国だと考えていました。それを担保していたのは、海軍力ですね。李鴻章が創設した北洋艦隊は、「定遠」「鎮遠」といった排水量七千トン以上、三十・五センチ砲四門という、国際的に見てかなり水準の高い装甲艦を擁していた。それに対

し、日本が頼みとする「松島」「橋立」「厳島」の三景艦は、フランスのベルタンの設計によるものでしたが、四千トン級にむりやり三十二センチ砲を積んだものだから、砲塔を旋回するだけで重心が狂ってしまうということでもない防護巡洋艦でした。しかも松島は主砲を後部甲板に、厳島と橋立は前部甲板に設けて、艦隊運動を前後一体できるようにしていました。自己陶醉のキワモノ設計ですよ(笑)。日本が本格的な戦艦を有するのは、日露戦争での「三笠」以降のことですが、その「三笠」よりも、「定遠」「鎮遠」のほうが上だったのです。

不思議なことに、日本では日露戦争に比して、日清戦争はあまり注目されていませんが、中国や韓国で、十九世紀でもっとも大きな事件は何かと尋ねると、日清戦争は二位か三位に入ってくるでしょう。なんといつでも清朝の崩壊を招いた大戦争なんです。

佐藤 日本ではベストテンにからうじて入るかどうかわかりませんが、

山内 近代で非西欧国が西欧の大国を打ち破った日露戦争が世界史を変えた戦争なら、日清戦争はアジアを変えた戦争だといえます。

さらに俯瞰してみるならば、日清・日露の時代は、世界的にも新興国が台頭した時期なのでですね。具体的には

う話がありました。その通りで、そこで起きていたのは清を中心とした東アジア秩序の再構築だった。それが一番はつきりとわかるのは、琉球との関係です。

もともと江戸時代には、琉球は日本と清とに両属する王国でした。江戸幕府にとって琉球は、清国との貿易・外交の重要な窓口のひとつだったのです。それが明治政府は、一八七二年から八〇年にかけての琉球処分によって清との絶交を迫るのです。

一八七四年に起きた台湾出兵も、そのきっかけは宮古島の漁民の問題でした。台風で遭難し台湾に流れ着いた漁民たち五十四人が、現地の人々に殺されるという事件が起きた。これに対し、明治政府が清国に賠償を求めると、台湾は「化外の地」だから清の責任は及ばないと断ってきたのです。そこで日本は補償占領という形で台湾に攻めていった。これが日本が行った初めての帝国主義的な戦争だったと思いますが、同時に日本は西洋近代のやり方で国際問題を処理することを学んだんですね。

山内 西洋近代の政治のルールでは、両属体制といった曖昧な関係は許されず、国家主権に基づいて領土が確定される。明治政府はそれを琉球にあてはめ、朝鮮にも清の属国ではなく独立国たることを求めたのです。一八九四年、朝鮮で東学党の乱が起きると、天津条約に基づ

アメリカ、日本、ドイツが、瞬く間に国民国家を形成して、世界史の表舞台に登場してくる。アメリカは一八六五年に南北戦争を終結させ国民統合が完成すると、アラスカを自国領にし、一八九八年の米西戦争でカリブ海さらにはハワイ、フィリピンまで手を伸ばします。ドイツは一八七一年、普仏戦争でフランスに勝って統一を成し遂げると、ビスマルクによってヨーロッパ大陸にフランスを包囲網を築き上げます。

そして、日米独の新興国がキャッチアップしようとしていたトップランナーがイギリスだった。その意味で、日清・日露戦争の時代は、新興国がイギリスに対してどのような関係を結ぶか、それが世界史の方向を決めた時代だともいえます。

佐藤 その点も、冷戦以降の世界情勢と重なり合いますね。トップランナーたるアメリカに、中国に代表される新興国がチャレンジャーする。多極化が進行する現代において日本がどのような位置取りをしていくべきかを考える上でも、この時代の研究は重要です。

### 「国民国家」のかたちが決まる

佐藤 先ほど日清戦争はアジアを変えた戦争だ、とい

いて、日本と清はそれぞれ鎮圧のために出兵します。日本は日清共同で朝鮮の独立援助と内政改革を行う提案をしますが、清は日本に撤兵を迫って譲らなかつた。これが日清戦争のはじまりです。

佐藤 実は、最終的に琉球が日本の国家統合に組み込まれたのは、日清戦争後のことです。敗戦した清は日本に台湾を割譲し、琉球の帰属を認めた。その意味では、日清戦争とは、今に続く国民国家日本のかたちを決定した戦争でもありました。

山内 先ほども触れたように、当時の清は、戦力的には日本以上の力量があるとみなされていました。それでも日清戦争に勝利できたのは、日本の方が国民国家として近代国際システムに適應する体制をいち早く整えていたからでしょう。

たとえば「定遠」「鎮遠」を擁する北洋艦隊にしても、清の国軍というよりも李鴻章の私兵に近い存在で、兵士の練度も低かったのです。また外交も、北京の総理衙門と天津の李鴻章(北洋通商大臣)で対立を繰り返していました。一方、日本では、維新の元勳たちが政治・軍事を一体のものとして掌握し、国家として戦争にあたることのできた。その差が大きかったと思います。

佐藤 清が日本に敗れたのをみて、すかさずチップを

置き直してゲームを始めてしまったのが、帝国主義政策をはじめた列強各国です。清は戦費と日本への賠償金のために、列強に巨額の借款を受け、港などを租借地に取られてしまった。またロシア、ドイツ、フランスは日本の遼東半島割譲に反対し（三国干渉）、自分たちの利権拡大の足がかりとしました。その結果、ドイツは膠州湾、ロシアは旅順・大連、フランスは広州湾一帯、イギリスは九龍半島・威海衛を我が物にするという大切り取り競争を繰り広げたのです。

### イギリスのテストに合格

山内 列強のアジア分割が加速する中で、日本にとって大きかったのは、なんといっても日英同盟締結（一九〇二年）です。当時、世界の最先進国だったイギリスといかなる関係を結ぶかは、新興国たる日本にとつてもきわめて重要な課題でしたからね。

そのとき見落としてはならないのが北清事変と義和団事件（一九〇〇年）でしょう。二十万人の義和団が北京に侵入、清の西太后はこの勢いを借りて、なんと欧米列強に宣戦布告を行います。そこで日本は英国の要請で兵を派遣し、米英露仏などともに鎮圧にあたった。つ

まり、英国は日本という国のレベルを試したわけですが、ここで北京公使館付武官だった柴五郎中佐は英語・フランス語・中国語などに精通して各国の意思疎通を助け、実質的に籠城戦の総指揮を執る大活躍を見せました。これによって、イギリスは、単なる軍力だけでなく、外交力、国際法の理解、信義を守る誠実さなど、日本を高く評価したのです。

佐藤 これには英国側の状況も大きく関係していますね。三国干渉によって露独仏の中国進出が活発化すると、先行していたはずのイギリスはいつしか孤立していた。特に十九世紀の初めから中央アジアをめぐる覇権争い「グレートゲーム」を展開してきたロシアと、極東でも衝突するようになったわけです。

イギリスが日本をテストしたのは、極東の地でロシアなどの攻勢に対抗して、英国の権益を任せられる相手かどうかということですね。

山内 そう。海洋帝国としてのイギリスの安全保障つまりシーレーンを保持するために、極東における同盟者に日本を選んだわけですね。

一八六九年、スエズ運河が開通しますが、時のエジプト副王イスマイルによる財政破綻に乗じて、イギリスはスエズ運河会社の株式を半分以上手に入れます。スメイ

ン継承戦争（一七二四年）で獲得していたジブラルタル、ナポレオンから手に入れたマルタ島を地中海の拠点とし、スエズ運河を抜けて、英領インド、シンガポール、マレー、香港、中国とつながるシーレーンこそ、イギリスの国力の源泉であり生命線になったのです。英国の歴史家がいみじくも言ったように、蒸気船はイギリスの版図をいちじるしく広げたのです。

そのなかで中国は、英国本国から最も離れた権益でした。そこに北から陸続きのロシア帝国が南下を始めています。中国とインドの権益をイギリス単独で守れないとすればどうするか——。その答えが日英同盟だったのです。

佐藤 この英露の対立が、日露戦争に大きな影響を与えるわけですが、当時の日露関係はどうだったのか。前回、前々回の「大日本史」対談でも触れてきましたが、世界史の中で考える上で非常に重要なポイントなので簡単に振り返ってみましょう。

もともと江戸から幕末維新にかけて、日本にとつて、ロシアという国はじつはアメリカやその他の国より対等な扱いをしてくれた国なんです。一八五五年に結ばれた日露通好条約（日露和親条約）では、領事裁判権は双方に認められている。関税自主権に関しても三年後には改定している。非常にフェアなんです。私は、これはロ

シアという国の外交的な狡猾さをよくあらわしていると思うんです。つまり日本を取り込むためには、フェアに付き合ったほうが中長期的にはうまくいく、という計算があるんですね。

山内 領土、国境、主権といった近代国家の問題を日本がはつきり意識したのは、実は江戸後期のことでした。樺太やクリル諸島などいわゆる北方領土がきっかけだったんですね。工藤平助や林子平らの海防策、間宮林蔵をはじめとする蝦夷地探索、みんなロシアに対する強い意識のあらわれです。感覚的には日本とロシアは非常に近い国だった。

佐藤 その関係が大きく変わったのが三国干渉だったと思うんです。

山内 しかも、干渉したあとに旅順と大連を占領してしまう。これには、ロシア国内でも反対があつて、ことに当時の財務大臣、後には日露戦争後にポーツマス講和条約で全権公使をつとめるセルゲイ・ウイッテは、そんなことをしたら日本という国はけつして黙っていない、日露間に戦争が起きる大きな原因になる、とちゃんと指摘していますね。非常に正確に未来を見通していた。

佐藤 日本に遼東半島を返還させておいて、そのあと自分たちが分捕ったわけですから、三国干渉自体が無意

味化してしまう。ロシアとしては文明国としての正当性を失ってしまったわけですね。

### 日露戦争の「架空戦記」

山内 日露戦争に入る前に、ちょっと切り口を変えてみましょう。ウィツテの「予言」の話が出ましたが、実は、日露戦争以前に、日本ではいくつか対露戦争を先取りした近未来小説が書かれていますね。その一冊を紹介しましょう。タイトルは『日露戦争・羽川六郎』。著者は東海散士。明治三十六（一九〇三）年の刊行ですから、開戦直前に書かれたものですね。日本文学史などでは「佳人之奇遇」などの政治小説で名を残していますが、彼の本名は元会津藩士、柴四朗。義和団の乱で活躍した柴五郎の兄にあたる人物です。

日露架空戦記の部分をかいつまんで言いますと、ロシア軍は平壤までは出てきませんが、そこから動かず、沿海州から上陸した日本軍と膠着状態に陥る。巨文島で大海戦を行うのですが、これも引き分け。そこにドイツが干渉する、という展開もなかなか鋭い。他方、当時はまだ出たばかりの飛行機が登場して、ロシア艦隊を偵察したりする。結局、ドイツは日本有利とみて、ロシアに味方

情報を圧縮して送っていた。だから、量的には個人が全て目を通せる量だったんです。いまのように膨大な情報が生のまま入ってきて、とても個人では把握しきれない。その意味では、かつての新聞人のほうが包括的な視野で世界の情報をウォッチできたといえる。

山内 逆に、日本が敗れるという小説もあります。新聞記者出身の平田骨仙の『帝国海軍之危機』では大連湾を攻撃した日本海軍は、ロシアの東洋艦隊との決戦で刺し違えになって、やつぱり膠着状態に陥る。そこにバルチック艦隊がやってきて、日本はあえなく挟み撃ちになつて敗戦を迎える。ロシアの国内情勢がすっかりしていれば、このシナリオも有り得たかもしれない。

佐藤 面白いのは、ロシアにも日本との戦争を予見した小説があるんです。神秘思想家として知られるウラジミール・ソロヴィヨフが一九〇〇年に書いた『戦争と進歩と世界史の終わりに関する三つの会話』という本の付録の「反キリスト物語」のなかで、日本が重要な役どころで登場します。

十九世紀半ばに長いまどろみから目を覚ました日本は、物事を模倣する能力がきわめて高く、高度な軍事国家を実現する。朝鮮を植民地化し、中国北部を占領、さらにモンゴルまで進んで、カラコルムに遷都するんです。

するのをやめる（笑）。

佐藤 ヴィルヘルム二世の性格をよくつかんでいますね。第一次世界大戦に負けてドイツ帝国を滅ぼしてしまった皇帝らしい。

山内 そうなんです。この近未来小説が冴えているのは、戦争に決着をつけるのは結局、和平会議だと喝破していること。ポーツマスではないけれど、英米中心で調停がおこなわれて、勝った日本側の要求は樺太全島の割譲と賠償金五億円。これも実際にポーツマスでの日本政府の要求とほとんど同じですね。さらに作者がただ者でないのが、満州問題に着目していて、日英米が行政官を派遣して共同管理する、としている点です。これは実は日露戦争後にアメリカが希望していた秩序なのです。加えて関東軍の設置まで予言している。

佐藤 東海散士はアメリカ留学を体験しているんですね。ペンシルバニア大学を卒業して、明治二十一年に大阪毎日新聞の主筆もつとめている（翌年退社）。この時期にそこまで状況を読めているというのは、新聞人として培った情報網によるところも大きかったのではないかと。というのも、日露戦争において、大阪毎日新聞は主戦論を唱え、他紙をリードする報道を誇っていました。

また重要なのは、戦前は電報代が高いために、外信はつまり日本皇帝はチンギス・ハーンの再来として、世界帝国を目指す。まずロシアがあつという間に負け、フランスあたりまで日本の支配下に入ってしまう。そこでヨーロッパに「キリストの再来」と呼ばれる偉大な人物が現れて、日本軍を再びウラル以東に押し戻すのですが、その人物は実は反キリストなんです。そしてロシアを隷属状態にしていますが、ロシア正教会のヨハン長老、プロテスタントの神学者パウロ、そしてカトリックのペトロ教皇の三人が、宗派の違いを乗り越えて反キリストを打倒していく。ある意味、黄禍論的なストーリーでもありますが、日清戦争の勝利後、日本がアジアの代表選手とみなされるようになったことのあらわれでもある。

### シフが日本に融資した理由

山内 では、いよいよ日露戦争について論じたいと思います。日露戦争は世界史を変えた戦争だといえる。その最大の影響は、なんといっても非西洋国家がはじめて近代化を果たし、ロシアという大国に勝利したこと。これによって、日本は責任ある大国の一員に加わったと同時に、それまでの西洋中心の世界秩序に対する攪乱要因

ともなっています。

この時期、日本と同様に、ヨーロッパの外から世界史の表舞台に華々しく登場した国がもうひとつある。それがアメリカです。この日本、アメリカの二つの新興国の関係は、日露戦争以後ますます重要になってくるのですが、これは後に詳しく論じることにしてしまおう。

佐藤 世界の戦史でも、日露戦争はいくつかの重大な節目となった戦いですね。なかでも大きな変化は、膨大な物量を前提とする総力戦となったこと。決定的だったのは機関銃が本格的に使用されたことで、そのために二百三高地などで莫大な死傷者が出た。これはヨーロッパ史上最大の犠牲者を出した第一次世界大戦を先取りするものです。

山内 海軍の事例では、日本で開発された下瀬火薬も戦争の帰趨に大きな影響を与えました。ロシア艦隊は砲撃するたびに、煙と煤で前が見えなくなるんです。ところが、日本の下瀬火薬は発砲しても煙が立たない。照準が合わせやすかったことが、日本海海戦での大勝につながったのです。

また物量戦を遂行する上で、きわめて重要な役割を果たしたのが鉄道ですね。一九〇四年、まさに日露戦争のただなかにシベリア横断鉄道が開通し、極東戦線に次々と公債を引き受けてくれた。

私が気になるのは、シフの動機なんです。通説では、ロシアでは当時ポグロム（ユダヤ人迫害）が起きていて、ユダヤ人のシフはそれに怒り、日本に味方したというものの。実際、シフ自身「ロシア帝国に対して立ち上がった日本は神の杖である」とも記しています。しかし、ロシアが反ユダヤ主義だからということだけで、五百万ポンドも融資するでしょうか。

山内 いろいろな要因があったと思いますが、やはり最終的には、日本がロシアに勝つと思っただのが大きいのではないですか。ユダヤ人のネットワークから、ロシアにおける革命的状况、ロマノフ朝がもう長くは続かないという情報をシフはつかんでいたのではないか。

佐藤 私は、シフは投機家として大博打を打ったと思うんです。もともとシフはニューヨークで無一文から這い上がってきた類の人間です。しかし、同時代の財閥ロスチャイルドやロックフェラーに比べれば、一歩譲らざるを得ない。もう一段上に行くには、何か博打を打たねばなりません。その大勝負の対象が日本だった。いま

と兵士や物資を送り込んできた。ロシアの運輸大臣でモスクワ・サンクトペテルブルク間に鉄道を敷いたメリニコフが「人類の歴史の中で、鉄道ほど短期間に国家と国家の相互関係のあり方を変えたものはない」と語ったように、鉄道によって大量の物資や軍隊の移動が可能になったのです。

そして物量戦に伴って、戦費もまた飛躍的に増大します。日清戦争で二億円強だったのが、日露戦争では十七億円（現在に換算するとおよそ六兆円）に達する。当時の国家予算がおよそ三億円ですから、五、六年分に相当します。

しかも、このほかに、戦前、イギリスに発注していた軍艦二隻の支払いも大きな負担になっていました。その頭金が十五万ポンドで、総額は百五十万ポンド。日本円で当時千五百万円くらいでしょうか。なんとか横浜正金銀行から融資を受けられたのは頭金の十五万ポンドだけ。そこで、日英同盟の立役者でもある林董公使が自らの責任で約束手形を振り出すとともに、日本銀行副総裁の高橋是清が日本国債二百万ポンドを横浜正金銀行に貸し出し、担保にあてるという案を出して乗り切った。これも国家としては相当きわどい冒険です。

佐藤 日露戦争の戦費で有名なのは、ジェイコブ・シフという投資ファンドのようなメンタリテイを持っていたのではないのでしょうか。

最終的に日本が集めた公債は、全体で七千二百万ポンド、当時のお金で七億円近く、国家予算二年分を超える途轍もない額にのぼりました。その意味では、日本も一か八かの大勝負だったわけですね。

山内 そこで興味深いエピソードがあります。戦争中に東京帝国大学工科大学学長がピカピカ光る金をもつて曾禰荒助大蔵大臣を訪ねてきたというわけです。聞けば、岩手県気仙地方に金の鉱脈があつて、埋蔵量は推定時価四十億円にのぼる見込みだという。報告を受けた桂太郎首相は大喜びし、すぐ明治天皇に奏上する。これが諸外国から融資を受ける際、担保として貢献したのですが、結論からいえば、この鉱山はたいしたことなかった。山師からの話を、帝国大学の教授が真に受けて、天皇や首相にまで話が上がつたうえに、実際に融資を引き出してしまふ。当時の東大教授の信用はたいしたものだった（笑）。

### 情報戦としての日露戦争

佐藤 日露戦争における日本軍の戦いぶりは、これま

でも様々な語られてきましたが、ここでは少し違った側面から論じてみたいと思います。それは情報戦としての日露戦争です。

日露戦争とインテリジェンスといえば、すぐスウェーデンで本格的な諜報活動を行い、ロシア革命の支援工作も手がけたという伝説もある明石元二郎がクローズアップされますが、総力戦という観点からみて興味深いのは、日本の商社マンたちの活躍です。彼らは世界各地の港から、バルチック艦隊の寄港、石炭の積み込みなどをチェックし、東京に全部打電していた。

山内 当然、そこには世界最大の海洋国イギリスのバックアップもありました。

ここで大きいのは、グローバルな通信網が成立していたことです。大西洋横断ケーブルができたのが一八六六年。一八七〇年にはインド洋海底ケーブルも設置され、一八七一年には長崎が香港・上海経由で国際電信網に接続している。このグローバル・ネットワークの最大の提供者であり受益者だったのがイギリスです。一九〇〇年当時、世界の海底ケーブルは約三十万キロだった。そのうち四分の三をイギリスの会社が使用していたのですが、日本は日英同盟によって、このネットワークの恩恵

海海戦は、無線を実戦にもちこんだ最初の海戦でしょうね。

佐藤 すこし技術的な話になりますが、日露戦争のときに使っていたのは三六式無線機で、一九〇三年に採用された当時最新の無線機でした。火花式の無線は同時に二箇所以上で通信しようとすると混信してしまうために一箇所しか使えません。だから、コヒーラー管という小型で手軽に搭載できる、当時最新のモデルを採用していました。七十海里も電波を飛ばせたといえますから、「敷島」一艦を中継するだけで、日本海から横須賀まで情報が送れるのです。ロシアは別の形式の無線を使っていたのですが、通信において日本が技術的に優位に立っていたことが、勝因のひとつとなったことは間違いありません。

山内 日本海海戦は海軍の総合力、なかでも技術戦の勝利でもありましたね。

佐藤 しかも、一九〇四年の時点で、有線の電信網が日本国内に構築できていましたから、どこかで無線を受ければあつという間に日本中に有線で情報を伝えることができた。外電（外国からの電報）も日本全国でとれた。国内の電信網が完備していたからです。

を享受することができたのです。

佐藤 ちょうど現在の世界で、アメリカがインターネットを牛耳っているようなものですね。

山内 そうかもしれません。たとえば国際電話の管理権は、基本的にはイギリスが持っており、日本には便宜をはかつて優先的に送ることが可能でした。逆に、ロシアの電報を故意に遅らせたり、隠してしまったりする。こうしたことが情報戦や神経戦として大いに役立ったと思います。

忘れてはいけないのは、この通信網によって、貿易決済や送金が容易になったことです。イギリスの植民地銀行である香港上海銀行は一八六六年から日本に支店を置いています。日露戦争期には五回も外債募集を取り扱うなど、いつそう密な関係を結んでいました。

### 無線技術と索敵能力

山内 もう一つ重要なのは、無線技術ですね。マルコニーが無線電信会社を設立したのが一八九七年。大西洋横断無線通信に初めて成功するのが一九〇一年。それを日本海軍は早速利用しているのです。その意味で、日本

また当時の日本は、竹島に哨戒所を設置するなど、索敵に非常に重きをおいていましたね。「信濃丸」のような特務艦が濃霧の中に入っていくと、敵を見つけることができたのも、情報こそが生死を決するという感覚が日本全体に共有されていたからでしょう。

山内 それだけ高かった索敵能力が、太平洋戦争になると、ミッドウェー海戦のように、哨戒機、偵察機といったプロの索敵任務が機能せず、大敗につながってしまった。歴史に学ばない日本の問題をよく表していますね。

佐藤 バルチック艦隊発見に関して、有名なエピソードがありますね。宮古島の漁師が北上する船団を発見、役場に駆け込んだのですが、島には無線がない。そこで五人の漁民を募って、施設のある石垣島まで百七十キロも舟を漕ぎ、山道を走破して電報を打った。

この逸話が示すのは、国民国家としての一体感の高さです。一介の漁民さえも、日露戦争を自分たちの運命を決するものと理解し、コミットしていた。これはやはり強い。顧みて現在の日本は、国民に一体感を与えられているのか。国民のコミットなしに、法律だけを作っても本当の安全保障は実現しないでしょう。

山内 日露戦争当時の人たちは、日本の危機に相当精

度の高いアンテナで反応し、自主的に情報を提供し、自分にできる貢献を考えていた。危機の時代こそ、この教訓の重さ、国民のひたむきな真面目さを想起すべきでしょうね。

### 歴史を動かした観戦武官たち

山内 日露戦争が世界に与えた影響を具体的にみていくうえで、私が注目しているのが「観戦武官」の存在です。

観戦武官というのは、交戦国以外の国から戦争を視察、研究する目的で派遣される軍人のことで、日露戦争では英米独からオスマン帝国、ブラジル、チリ、アルゼンチンといった南米の国々まで十三カ国七十人以上の武官が参加しています。二十世紀になって最初の近代化された正規軍同士がぶつかり合う戦争として、日露戦争は注目されていたわけですね。

この観戦武官たちのその後を調べていくと、世界史で重要な役割を果たした軍人が少なくありません。たとえば、英国のイアン・ハミルトン中将。彼は第一次世界大戦で有名なガリポリの戦いの指揮を執ることになります。この戦いは、英仏を中心とした連合軍がオスマン帝

デンドルフの作戦参謀としてタンネンベルク会戦のプランを立案したのです。ロシアの第一軍が出てこないと思定め、鉄道を使って素早く兵力を移動、第二軍を一気に叩く。こうしたホフマンの戦術には、大胆不敵な黒木の采配ぶりを彷彿させるものがあります。

佐藤 十五万人のドイツ軍が四十万人を超えるロシア軍を殲滅した、戦史上でも類をみない大勝利ですね。

山内 そこで今度は、第一次世界大戦の欧州戦線を観戦した日本陸軍の軍人たちは、ドイツ陸軍の鮮やかな戦いぶりにすっかり魅せられてしまった。作戦の神様と言われた小畑敏四郎なども、兵学教官時代、ことあるごとにタンネンベルクを引き合いに出したといわれているくらいです。

佐藤 しかし、日本の陸軍はドイツの参謀本部に学んだことで、ガバナンスがおかしくなっていくんですね。というのは、参謀本部というのはあくまでもスタッフなんです。企画立案を担当するだけで、決定・命令を司るライン、すなわち司令部ではないんです。ところが、特に昭和の陸軍においては、参謀本部が実質的にすべてを決めてしまっていた。

山内 その通りですね。特に参謀本部第一部、作戦部の権力が肥大して、陸軍省の権限まで侵犯して戦争の政

国の首都イスタンブールを占領するために、ガリポリ半島で行った、陸海空の三軍を動員した大規模な上陸作戦です。第二次大戦のノルマンディー上陸作戦などのルーツともいえる。

佐藤 トルコ側で指揮官の一人として采配をふるったのがケマル・アタチュルクですね。英軍の進撃を食い止めたことで、彼はトルコの英雄となり、その後、クーデターを起こして初代大統領となった。その意味でも世界的な戦いだといえます。

山内 そのとおりです。このガリポリ上陸作戦に大きな影響を与えたのが、日露戦争における金州上陸作戦、鴨緑江の渡河作戦だったようです。ハミルトンは、これらの作戦を指揮した黒木為楨(なごもと)将軍に随行し、つぶさに日本の用兵術を視察していたのです。

アメリカからも大物が参加していました。駐日大使館付の駐在武官だったアーサー・マッカーサー・ジュニア、すなわちダグラス・マッカーサーの父親です。彼は乃木希典、黒木為楨、大山巖といった日本軍人の崇拜者だったと言います。

そして、ドイツからはマックス・ホフマン大尉が参加していた。彼も満州の各戦線で黒木將軍と行動をとともに、第一次世界大戦が起こると、ヒンデンブルクとルー

治指導に立ち入るのですが、あれはまぎれもなく越権行為なんです。

佐藤 だから昭和の陸軍は無責任体制になってしまったのです。あくまで参謀は立案、意見具申、助言しただけなので、いざ失敗した時には何の責任も取らない。

山内 そこを誤解したアメリカは、東京裁判では陸軍省など軍政系統を中心に訴追し、作戦・参謀系統の軍人の多くは免責してしまつた。日本の参謀本部のありかたが特殊過ぎ、外国人には理解できなかったのでしょうか。話をタンネンベルクに戻すと、もうひとつ日本との面白い因縁があるんです。この戦いでロシアの第一軍を率いていたのはパーヴェル・レンネンカンフ、第二軍はアレクサンドル・サムソフでした。

この二人は日露戦争でも旅団長を務めていたのですが、奉天の戦いが終わってロシア軍が退却する際に、奉天駅前で殴り合いの喧嘩をしたという逸話が残されている(笑)。それほど仲が悪かった、というわけですが、ホフマンは日露戦争の観戦武官として、彼らの関係を知っていた可能性がある。

事実、タンネンベルクでも、ロシアの第一軍と第二軍は連絡をろくに取ら合っておらず、しかも、軍命令の伝達にも暗号もかけずに平文で送るなど、そこかしこに綻

びが見えていたんですね。つまり、ホフマンが第二軍を叩いても第一軍は来ないと確信できたのは、日露戦争での観戦体験から、ロシア軍の亀裂を察知していたという要素もあったのではないのでしょうか。

### 海のパワーバランスが変わった

佐藤 近年、日露戦争こそ第一次世界大戦に先行する総力戦だった、という見方が提出されていますが、その世界的インパクトの大きさ、そして英米独といった先進国がいかにこの戦争から深く学んだかがよく分かりますね。では、当事国である日本は、日露戦争から何を学んだのか、より正確には学びそこねたのかを最後に論じたいと思います。

山内 日本の犯した最大の誤りは、ロシアという陸の大國と戦った結果、大陸にばかり気を取られて、よりグローバルな海洋の世界で起きている大きな変化に気がつかなかったことでしょう。

そもそも世界史から見た日露戦争とは、陸のロシア vs. 海のイギリス・日本同盟の戦いでした。そして日英同盟により、イギリスは太平洋に対する関与を縮小させている。そうすると、太平洋に残された海軍大國は、日本と

アメリカという二つの新興國ということになります。この海のパワーバランスへの備えが、日露戦争以降の最重要課題となるはずなのですが、パワーバランスの変化の本質を明治以降の日本政府、あるいは日本海軍は十分理解できなかったと思います。

佐藤 いまのご指摘はとても重要で、実はアメリカにとっても日露戦争は、単にポーツマス条約の調停者というだけにとどまらない、重大な意味を持つ戦争だったと思います。つまり、それまで孤立主義を掲げてきたアメリカが、帝國主義國家としてアジアに乗り出す最大の契機となったのが日露戦争ではなかったか。

しばしばアメリカは一八九八年の米西戦争によってフィリピンを獲得し、アジア進出の足がかりを作ったとされていますが、これはいわばアジアの前庭に椅子を一つ置いたに過ぎません。それが日露戦争を機に、あたかも好意的中立者という立場で、門戸開放を唱えつつ、満州に入ってきた。つまり本丸であるユーラシア大陸に本格進出する、かつこの入口となったわけです。そう考えると、シフによる日本への援助も、日露戦争後、アメリカの鉄道王ハリマンが満鉄の共同経営を持ちかけてくるのもよく理解できる。

山内 そのアメリカの野心、日露戦争後のパワーバラ

ンスの変化をよく見抜いていたのがイギリスでしょうね。イギリスからすれば、これまで陸と海の対決でグレートゲームを演じてきたロシアが後退し、より鮮明になってきたのは日米独、この三つの新興國が新しいチャレンジャーだということでした。そのうち、日本とはすでに同盟関係を結んでいる。イギリスが最も恐れたのは、今となつては意外かもしれないけど、ドイツとアメリカが手を組むことだったのですね。

佐藤 これはけつして非現実的なものではなくて、第二次大戦に至るまでドイツ系アメリカ人はたくさんいて米国内で結構力を持っていました。またナチス・ドイツが台頭しても、ケネディ大統領の父で在英大使だったジョセフ・ケネディやリンドバーグなど親ナチの有力者も少なくなかった。

山内 ここで面白いのは、イギリスはアメリカを恐れるがゆえに、英米関係をより強固にしようとするのです。しばしば英米は同じアングロサクソンだから一体だ、と言われますが、実際の歴史はそんな単純なものではない。アメリカのパワーを警戒し、抱き込みにかかるなかで、「アングロサクソン」という一体感を演出していた、というのが実態に近いと思います。

佐藤 同感です。その結果、日英同盟は有名無実化し、

第一次大戦後には、四方国条約、ワシントン条約によって、日本は集團安全保障体制に組み込まれてしまう。ここが日本外交のターニングポイントですね。私はやはり日英同盟を強化することで、アメリカとのパワーバランスをとっていくべきだったと思います。

山内 そうです、日英同盟を破棄する必要はなかった。むしろイギリスとの友好関係を背景にして、日米関係という新しい安全保障の枠組みづくりを傾注すべきだったのです。

佐藤 結局、日本は、「海洋國家」として最大の脅威は「海洋國家」だという地政学の基本がわかっていなかった。さらにいえば、最大の脅威といかにうまくやるかが外交上最も重要なのだと、どこまで理解できていたか。

山内 その点、アメリカは日露戦争における日本の戦いの意義を高く評価したからこそ、太平洋における強力なライバル國として危機感をもつのですね。一九二〇年代には「オレンジプラン」という対日作戦計画を策定する。一方、日本はそうした未来ヴィジョンをまったく用意していなかった。

こうしてみると、昭和の悲劇は、日露戦争という世界を変えた大戦争の意義を、当の日本がよく理解していなかったことに源があるのかもしれない。